

日本の光学研究と Optical Review

野村孝徳
(和歌山大学)

6月号が発行される時期がやってきた。いつもの号とは異なり、1年間の「日本の光学研究」を一望できる号である。日頃の忙しさにかまけ、論文や学術講演会をウォッチし続けることができない筆者には、実にありがたい。一昨年からはじめたばかりの特集であるが、もうすでに恒例の企画として認知されているように思う。昨年6月号の巻頭言で静岡大学の川田先生が書いておられるように、「21世紀は光の時代」であることを象徴するかのような多数の研究で溢れている。「光の日」や「国際光デー」も21世紀になって制定され、やはり光の時代らしい。

ところが、である。大学の学科名に目を向けてみると、「21世紀は光の時代」というのは幻ではないかとさえ思ってしまう。前世紀には光と名のつく学科名は多数あったが、いつの間にか改組の波に巻き込まれ、減りつつあるのが現状である。「光」のつく学科名はwikipediaによると19個あるが、12個は「観光」の「光」であり、「光学」の「光」は7つしかない。7つの中には筆者の所属する和歌山大学の「光メカトロニクス」学科も含まれているが、すでに改組により消滅した（皮肉なことに観光学部はある）ので、実態はもっと少ないはずである。

話を「日本の光学研究」に戻そう。掲載された研究が発表された媒体は、学術講演会から国際学術誌へと多岐にわたっている。取り上げられているのは、読者の皆さんに馴染みのある学術講演会や国際学術誌ばかりではないと思う。研究内容はもちろんのことであるが、こうした学術講演会や国際学術誌の気づきも、この特集の楽しみのひとつである。さて、その講演会や学術誌であるが、「日本光学会年次学術講演会」には登壇されても、日本光学会の英文誌「Optical Review」（以下、OR）に投稿される方はかなり少ないのではないだろうか。そこで、編集委員長としてお願いである。特に若い方は、ORを投稿先の選択肢に入れてほしい。あまり知られていない（ように思う）が、ORに発表された原著論文の第1著者（満30歳未満）は、光学奨励賞の選考対象にもなっている。もちろん、日本光学会の会員であることがその要件であることをお忘れなく。なお、ORの閲読は、皆さん多忙な中、時間を割いて行われている。閲読者が時間を割いた甲斐があったと思えるような論文を、ぜひ投稿してほしい。投稿先決定の際に気にするImpact Factor（この指標がすべてではないが）も上昇傾向にある。ORに関わってくださっている方々のおかげである。